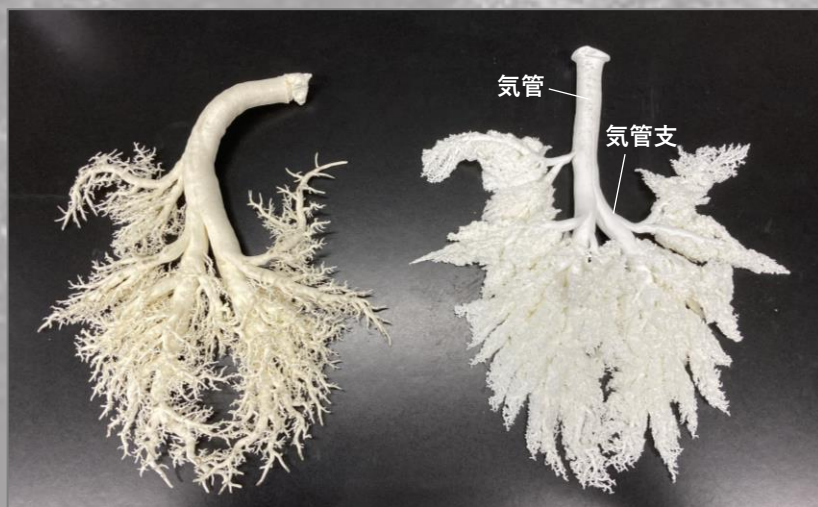


1年生全クラスと2年生の生物選択向けに**ブタの臓器の観察会**を行った。心臓や肺、胃、腸、腎臓などなど一揃い全部観察した。各臓器の説明は生物のT先生にしてもらう。からだの構造に詳しい物理のS先生も飛び入り参加して解説してくれたり、豪華な授業になった。にぎやかな授業の噂が広まったみたいで、英語科のF先生がおっかなびっくりで生物室を覗きに來たり、他にもいろんな先生が見学に來てくれた（たぶんみんな怖いもの見たさ）。解剖は人を惹きつける、インパクト大の教材だ。コロナ禍では思うように実験ができない期間もあったが、やっぱり実物に触れるのは大事だなあ。「**やっぱ生物って楽しいー！**」と感激してる2年生のユウキや、同じく2年生のスズナに至っては化学選択なのに放課後わざわざやってきて、**肺を見て「かわいい〜！」**なんて言う始末。さすが、うちの生徒は解剖系に強い。驚いたのが、「もっとやりたい人は放課後集合！」とT先生が声をかけたら、20人くらいが集まったことだ。連日使い回された“生モノ”は結構臭かったのだが、みんなそんなことは気にせず放課後おかわりタイムを楽しんでいた。

中でもインパクトがあるのは、やっぱり肺だ。ブタのしぼんだ肺の気管の部分にホースを突っ込んで、思いっきり息を吹き込んでみると、**信じられないくらい膨らむ**。あまりに膨らむので吹き込む担当の人の息が持たない。そんな吹く人の必死さはつゆ知らず、みんなで膨らんだ肺をつんつんして楽しんだ。このまま風船のように飛んでいってしまうのではないかと思うくらいふわふわになっていた（食肉としての肺の名前は「フワ」という）。せっかくなので、**肺のシリコン標本を作ってみることにした**。数年前にもやったのだが、シリコンの粘度が高くてなかなか細部まで届けるのが難しくて、その時のリベンジをしたかった。力自

慢はいないかと募ったら、1年生のユウトが名乗り出てくれた。コーキングガンで一気にシリコンを注入する。結構握力が必要で大変なのだが、本当に初めてかと疑いたくなるほど上手い！気管の入り口を押さえているソウトの役目も結構重要だが、安定している。**これは期待できるぞ！**この後、数日かけて肉の部分を水酸化ナトリウムとポリドントで溶かす（＝超臭い）。臭くて一番大変な作業はI先生が全部やってくれた。ありがとうございます。そして、完成したものを見て驚いた！**すごい細部までシリコンが行き渡ってる！大成功だ**。美しい肺の内部の構造を知って、みんなで「臓器ってすげえ！」と感動しながらこの実習を終えた。

参考：加藤嘉太郎、山内昭二、2003、新編 家畜比較解剖図説（上巻・下巻）、養賢堂



ブタの肺のシリコン標本。左が数年前の微妙な完成度のもの。右が今回。今回作ったものは細部までシリコンが行き渡っているのが分かる。おそらくこれでも本当の先端部までは届いていない。肺の内部ってこんなに細かいのか！



ブタの肺を膨らませている様子

本当は写真を載せようかと思ったが、臓器はさすがにダメかと思って今回はイラストで。



肺胞がある部分。先端部はものすごく細かくて表面積を稼いでいる。空気はこんなに枝分かれしながら肺の奥に送り届けられるのだ。